



障害と

身体を

めぐる旅

2017

平成 29 年度かながわボランティア活動推進基金 21・協働事業負担金「地域における障害者の文化芸術体験活動支援事業」
認定NPO法人STスポット横浜、神奈川県保健福祉局福祉部障害福祉課、神奈川県県民局くらし県民部文化課

ごあいさつ

STスポット横浜は、神奈川県横浜市にあるNPOです。「舞台芸術を中心としたアートと市民社会の新しい関係づくりを推進するとともに、アートの持つ力を現代社会に活かし、より豊かな市民社会を創出すること」を使命に、横浜市内で一番小さな劇場・STスポットを運営する芸術機関として1987年に活動を開始しました。2004年からは地域コミュニティに向けた活動を担う、地域連携事業部を設置し、学校でのアーティストによる授業実施や、民間の文化団体支援などを行っています。

福祉分野における芸術文化活動の基盤整備事業は、2016年から開始しました。今年度からは、平成29年度かながわボランティア活動推進基金21・協働事業負担金として「地域における障害者の文化芸術体験活動支援事業」を開始しました。この事業は、地域に暮らす障害者が、文化芸術体験活動を通して生活の質を向上させ、社会の中で顕在化することで、障害の有無にかかわらず共生する社会の実現に向けた基盤整備の一翼を担うことを目的としています。

【事業1】ワークショップ実施事業

神奈川県内の障害福祉サービス事業所等に芸術家を派遣し、施設の希望に応じて演劇やダンス、音楽等、広範な文化芸術体験を実施しました。8ヵ所、23回にて行いました。

【事業2】コーディネーター育成事業

文化施設職員を中心にワークショップ事業の成果の共有や養成講座を実施し、障害者の文化芸術体験活動を支援するコーディネーターを増やし、県内のネットワーク構築を目指しました。勉強会を4回、報告会を1回実施しました。

【事業3】調査研究事業

神奈川県内における障害者の文化芸術体験活動の事例蓄積を行いました。神奈川県福祉施設へのアンケートおよびヒアリングを行いました。

障害と身体をめぐり、本年もさまざまな風景、表現と出会いました。この冊子では、旅の様子をみなさまにお伝えできたらと思います。

目次

[ワークショップ実施事業]

- 04 リエゾン笠間×水内貴英（現代美術家）
 - 五感を使って空間に触れる
- 06 みどり福祉ホーム×ドゥイ（造形ユニット）
 - いろとりどりの表現を見つめる
- 08 飛行船×花崎攝（演出家）
 - 物語のなかで表現を楽しむ
- 10 光の丘×向雲太郎（舞踏家）
 - そのままの身体と向き合う
- 12 Y S K作業所×上村なおか（ダンサー、振付家）
 - 自分とみんなの身体に気付く
- 14 まどか工房×即興からめーる団（音楽ユニット）
 - ひとりひとりの個性で歌づくり
- 16 よこはまりバーサイド泉Ⅲ×即興からめーる団（音楽ユニット）
 - 音を見つける、音楽を楽しむ
- 17 ザ・PUSH×西井夕紀子（作曲家）
 - それぞれの思いをつむぐ

[コーディネーター育成事業]

- 障害福祉と文化芸術の関わりを考える 勉強会・報告会
- 18 作業所から見える風景、地域とつながる方法
ゲスト：鈴木励磁（地域作業所 カブカブ 所長）
- 19 障害のある人たちの日々の生活に触れる
ゲスト：中村麻美（地域活動支援センター ひふみ 施設長）
- 20 みんなが楽しめる美術館って？
ゲスト：立浪佐和子（横須賀美術館 学芸員）
- 21 舞台と観客の関係づくり～舞台手話通訳の現在
ゲスト：米内山陽子（劇作家 演出家 舞台手話通訳）

[調査研究事業]

- 22 ヒアリング結果
- 24 県内事業所 アンケート 集計結果
- 26 障害福祉と文化芸術の関わりを考える報告会
ゲスト：浦郷大佑（障害者サービス事業所まどか工房）
即興からめーる団(赤羽美希、正木恵子／音楽ユニット)
塚原沙和（特定非営利活動法人スローレーベル）



美術 リエゾン笠間×水内貴英 五感を使って空間に触れる

リエゾン笠間は、横浜市栄区にある障害者支援施設です。
身体障害の20～70代の方が50名ほど入所し、
自宅からの通所者が1日平均して8名ほど利用しています。
同施設に、2017年11月～2018年1月に、
美術家の水内貴英さんと3回にわたって訪問しました。
水内さんの創りだした、不思議なバルーンの木による非日常の空間と、
「触れてみたい」「なんだろう？」をかき立てるさまざまな仕掛けのなかで、
利用者みなさんと職員みなさんが一緒にお散歩を楽しみました。
なるべく多様な体験をしてもらえる機会を持ちたいという
職員の想いと非日常空間での体験が、
利用者みなさんのさまざまな反応を引き出していました。



1日目 感触を味わう

ビニールのバルーンでできた大きな木がリハビリ棟に出現。部屋に入ってきた瞬間、みんな非日常の空間に驚いていました。水内さんがバルーンにトイレットペーパーを付けていくと、木の下を通してペーパーに触れたり、自分の力で手を伸ばして引っ張ってとったり、ゴールテープのように切っていく。普段は「やっちゃダメ」と言われているようなことをやっていいとなると、誰でも生き生きと楽しんでしまうものです。トイレットペーパーが顔や身体に触れる感触、それに徐々にススキや葎、花紙などが加えられ、なんだ？この感触？という刺激にワクワクが広がります。非日常の空間のなかで、感触や風景が変化していくのをゆっくりと感じられた時間となりました。

2日目 音を感じる

2日目は音をテーマに、バルーンの木の下を散歩しました。前回のトイレットペーパーに加えて、麻ひもにつるした鈴やマラカス、缶詰の缶やアルミホイルがぶら下がっています。気に入った物を手にとって、自分の耳でシャラシャラと鳴らす方や、職員のみなさんに鳴らしてもらって、さまざまな素材の音を楽しむ方。

■アーティストからのコメント

今回、リエゾン空間での活動の中で特に強く感じたことは、重度の障害のあるみなさんと行う造形ワークショップの可能性です。利用者と介助者がペアになって参加されることで、介助者が、利用者と他の利用者、空間、素材などとの間を取り持ち、対話や動作に驚くほどの自由度と熱量が生まれ、ワークショップが成立することに驚きました。同時に、このようなケースでは、プログラムは、利用者と介助者の両方に向けての内容として発想されなければならないと感じました。今回の経験を次の活動にも繋げていきたいと思います。(水内貴英)

■福祉施設からのコメント

立体的な空間づくりに感動しました。芸術家ならではの空間演出が非日常に変わるということに気づきとても勉強になりました。感情を表出することが困難な利用者は、非日常を感じてもらう事で感情の表出につながればと常々思っていたので、そういった方々に対しても、ぜひ提供していきたいアイデアだと思います。1日目に不快に思っていた利用者が、2日目をお休みし3日目に参加した際は、安定していて慣れた様子で散策している姿を見て、1日目で決めつけないことが大事であると改めて思いました。(飯田智子)

楽器の音だけでなく、素材によって異なる「ぐしゃぐしゃ」「ピリピリ」といった音の繊細な違いにも、それぞれに好みや心地良さを発見しているようでした。これは何の音だろう？ここはどこなんだろう？とイメージがわくような音に、職員のみなさんとの会話も弾みます。

3日目 光で遊ぶ

3日目は光をテーマに、幻想的な風景を体験しました。キャンドル風のライトやサイリウムライトを、木にぶら下げたり手に持ったりして、やわらかく灯る光にはじめは心奪われた様子のみなさん。徐々に慣れてくると、ためらいなく手を伸ばしてバルーンに触ったり、木にぶら下がった光を集めようとしていたり、外側から静かに眺めたり。最後にバルーンの中に仕掛けられた光が灯ると、思わず顔が上がります。みんなで木の下に集まって、光の色の変化を感じながら何を話すでもなく輪になっている姿は、どこか不思議な絵本の世界にきてしまったようでした。

リエゾン空間×水内貴英
五感を使って空間に触れる

期間：2017年11月30日(木)、12月20日(水)、
2018年1月18日(木) (計3回)

時間：1日目・10:15～11:20、2、3日目・
13:30～14:30

参加者：1日目：12名、2日目：10名、3日目：
8名

施設名：リエゾン空間

運営法人名：社会福祉法人同愛会

施設種別：障害者支援施設

住所：神奈川県横浜市栄区笠間 3-10-1

URL:<http://liaison-kasama.com/>

アーティスト：水内貴英(現代美術家)

みずうち・たかひで

1979年岡山県生まれ、武蔵野美術大学中退。
2002年「それぞれが望むもの」津山芸術祭/
03年・09年「MEETS」・「虹色の蛇」越後妻有ア
ートトリエンナーレ/04年「こどもが彩るまち
づくりプロジェクト」(東京都墨田区)/05年
「水内測量社」広島市現代美術館、新・公募展/
06年「晩餐会 矢継ぎ早なドラマ」食と現代美
術 PART2、BankART Studio NYK/02年～04
年「渋谷表現学校」東京都渋谷区。01年よりプ
ロジェクトワークやワークショップなどを中心
に作品を発表している。特に、アートで実社会
にどのように切り込んでいくか、場所、人、空間、
歴史などを読み解きながら展開されるプロジェ
クトワークは、パフォーマンス、インタビュー
から壁画、陶器、写真、音を使ったものまで各
プロジェクトによって様々で、また、長期にわた
って継続的に行われるものも少なくない。

<https://www.takahidemizuuchi.com/>





美術

みどり福祉ホーム×ドゥイ いろとりどりの表現を見つめる

1986年の完成当時から、
横浜北部の重度重複障害者の日常を支えているみどり福祉ホーム。
今年度は造形ユニット・ドゥイのお二人とお伺いし、
3回のワークショップを行いました。
1回目と2回目は、午前と午後で2グループに分かれて少ない人数でじっくりと。
3回目は全員で一日のワークショップを体験しました。
作品を完成させる以外にも、指先で素材の感触を楽しんだり、光の反射に気付いたり。
あらかじめゴールを設定するのではなく、
その場で現れたものを大切に進行していくことで、
それぞれの活動ペースに合わせた多様な関わり方が生まれました。



1日目 素材の遊び方を試す

開始時間が近付き、少しずつ集まってくる利用者のみなさん。ドウイの二人は、一人一人に近づいて、ゆっくり自己紹介を行います。自己紹介を繰り返した後は、みんなで紙をちぎってみます。まずは白の普通紙。それからピンクや水色の画用紙、オレンジの薄紙、硬めのチラシなど。部屋に張り巡らされたセロハンテープに切った紙を張り付けていくと、部屋全体がぱっと華やぎ、カラフルな森のようです。気付けば、車椅子や補装具にデコレーションを施している人たちも。その後も、そっとホイル紙の反射を楽しんだり、やぶく音に集中したり、細かくちぎって紙吹雪にしてみたりと、楽しみ方は人の数だけ生まれていきました。

2日目 空間のうつろいを感じる

今日も、一人一人と自己紹介をし合うところからスタートしました。カーテンを開けた部屋の中央では水の張られた大きな水槽。天窓から入る日光と、プロジェクターの光に照らされてきらめく水面に、それぞれが好きなものを置いていきます。ビー玉はすぐ沈む。じゃあモールはどうか。ストローにクリップをつけてみると……？色々な素材を通して水と遊んでいると、プ

ラスチックで出来た魚型の枠が配られました。見ると、ちょうど骨のようにセロハンテープが張ってあります。カラーセロハンやホログラムシートを貼りつけていくと、鮮やかな鱗(うろこ)に覆われた魚の姿に。セロハンテープで吊り下げると、プロジェクターから投影される水中の映像の上で、魚の影がゆらゆらと壁に泳ぎました。

3日目 形をつくって味わう

この日は、これまでとは違う部屋で集合。机の上には、お団子のように丸められた黄・桃・白・黒・茶・緑の生地と、色々な具が並びます。今日はおまんじゅうを作るそう。ふにふに柔らかい生地を伸ばして広げて具を包むのですが、ちぎったりつねったり感触も楽しみながら、具のつまみ食いもしてみます。丸く成形するだけでなく、動物の形や、レーズンで顔を描くなど、それぞれのこだわりが発揮されました。おまんじゅうを沢山つくった後は、昼食をはさんで、これまでのプログラムをスライドで振り返りました。前回のワークショップで作った魚を自宅の窓辺に飾っているという方も。最後には蒸しあがったおまんじゅうが登場し歓声が上がりました。

■アーティストからのコメント

ワークショップをやるにあたり、普段から、なるべくゴールは決めずその場の雰囲気でも即興的に進めていくように心がけていますが、今回、参加者やその場に居る人達とどれだけ対話できるか(言葉だけでなく)がとても大事に感じました。毎回ワークショップ後に支援者の方達とふりかえり出来たことで気付かされたことも沢山ありました。今回のワークショップがすべて満足のいくものだったとは言い難いですが、私達としては大変実りのあるものとなりました。ありがとうございました。(ドウイ)

■福祉施設からのコメント

美術の芸術家との関わりは施設として初めてでしたが、事前に写真での説明や文章があったのでとてもわかりやすかったと思います。これまでの創作活動などでは、やることある程度決めてある中での実施が多かったので(例えば、見本のものがあってそれに近いものを作る)今回、それぞれの自由な表現をだすのに支援者に当初とまどいがあったように見られましたが、利用者、支援者ともにこういった枠にとらわれない自由さを感じられる良い機会となりました。また、支援者の意識を変える機会にもなりました。(鈴木聡子、渡邊紘士)

みどり福祉ホーム×ドウイ
いろとりどりの表現を見つめる

期間：2018年1月15日(月)、1月29日(月)、
2月5日(月)(計3回)

時間：10:30～14:15

参加者：1日目：16名、2日目：18名、3日目：
18名

施設名：みどり福祉ホーム

運営法人名：NPO法人みどり福祉ホーム

施設種別：障害者地域活動ホーム

住所：横浜市緑区十日市場808-3

URL:<http://midori-fukusi.wixsite.com/midorifukusi>

アーティスト：ドウイ(造形ユニット)

ドウイ

小野亜斗子と轟岳によるユニット。2006年より、横浜・石川町で出会った元クリーニング店の建物を自ら改装した「ドウイ山」にて「ドウイのこども造形教室」を開き、こども達との閃きのセッションを日々展開。「ドウイのこども造形教室」以外にも、保育園や幼稚園、学童保育所の他、各種の催しにて、参加者それぞれの発想や閃きの面白さと、即興性を大切に考える「クリエイティブな遊びの時間」を通し、創作行為をより身近でより深いコミュニケーションの手段とすべく活動。

<http://duilab.com>





演劇 飛行船×花崎攝 物語のなかで表現を楽しむ

飛行船は、横浜市瀬谷区にある障害者支援施設です。もともとダンスホールだったところを改装してできたこの場所には、知的障害のある10～60代の方35名程度が、豊かに日々を過ごすことを大切にしています。今回は、花崎攝さんと一緒に、今まで体験したことのない演劇を通して、新しい表現の可能性を探る取り組みを行いました。全体を3つのグループにわけ、少人数でやりとりを重ねていきました。わらべうたを使って体を楽しく動かしながらアーティストと出会い、最終的には、動物が登場する短い物語をつくりました。職員のみなさんの手作りの小道具なども加わり、それぞれの人のささやかな表現をその場にいるみんなで共有する時間となりました。



1日目 想像して演じてみる

初回は、1グループ10人ほどに分かれ、各グループの参加者の様子に合わせて、内容も柔軟に変更しながら進められました。初めに自己紹介を兼ねて自分の名前に加えてポーズをとり、それをみんなで真似することで身体を動かすゲームを行いました。次に『なべなべそこぬけ』を全員で手をつなぎ行います。成功すると「やったー」とみんなで拍手をし、失敗しても手や身体が絡まり合う状態になり、参加者にも笑いが広がりました。木になりきってみんなで森を作り風に吹かれる、自分の好きな動物になって鳴きまねや動きを表現するなど、演じるプログラムではほとんどの方がすなりと役に入って表現をしていました。参加者それぞれの中で状況や場面がイメージされていることがうかがえました。

2日目 シーンをつくってみる

まずは全員で輪になってタオルを隣の人に回し、そのあとにタオルは実際にはない(無対象)けれどもあるつもりで隣の人に渡す、というプログラムを行いました。渡すものは、長くなったり重くなったり大きくなったりと、状態が変わっていきませんが、参加者は身振り

手振りで表現をすることができていました。

次に、動物の絵カードを示して参加者に好きな動物を選んでもらい、チームに分かれて「おなかですいた」とエサを探しに行く設定を作りました。エサを見つけて食べる仕草をしたり、チームの仲間と分け合ったりと参加者それぞれの反応を見せていました。また、エサを食べているときに、アシスタント扮する敵がエサを横取りに来ると、怒った鳴き声を出して感情表現をしている人もいました。

3日目 ひとつのお話をつくる

最終日の今回は、それぞれの選んだ動物になりきり、物語の中で遊びました。物語では、水飲み場の大切な水を山に住む龍が持って行ってしまおうのですが、何とかして取り戻しに行こうとします。丁寧にお願いをしたり、無理やり力づくで取り戻そうとしたり、挑み方はそれぞれですが、自分で選んだ動物の特性を生かし、仲間と協力することで取り返すことができました。これまでにやってきた小さな物語で遊ぶことの体験があったため、設定の中での時間の過ごし方も慣れていて、演劇をすることを通して、やりとりを十分に楽しむことができました。

飛行船×花崎攝
物語のなかで表現を楽しむ

期間：2017年10月4日(水)、18日(水)、25日(水)(計3回)

時間：いずれも10:30～11:45、13:00～14:00、14:00～15:00

参加者：1日目:32名、2日目:31名、3日目:31名

施設名：生活介護事業所 飛行船
運営法人名：特定非営利活動法人でっかいそら
住所：横浜市瀬谷区瀬谷5-15-5 グランドユール1階
URL:<http://www.dekkaisora.jp/shuroshien/hikousen.html>

アーティスト：花崎攝(演出家)
アシスタント：倉田春香、荻野亮一

はなさき・せつ

俳優・演出・ワークショップ進行役。武蔵野美術大学非常勤講師。野口体操講師。劇団黒テントでアジアの民衆演劇の手法に出会う。1994年ー95年渡米、ニュージャージー州プリンストンの地域劇団クリエイティブ・シアターで活動。ヴァイオラ・スポーリンなどの即興劇の手法、クリエイティブ・ドラマにふれる。帰国後黒テントを離れ、各地で演劇ワークショップと公演活動を行う。とくに子どもと女性、障害のある人とのワークショップを中心に、演劇を社会的により開かれた表現行為として活かすとともに、演劇の成立する関係、および身体表現の可能性を探っている。課題検討討論劇ともいうべきフォーラム・シアターも実践中で、家族、ジェンダー、ハラスメント、ドメスティック・バイオレンスの問題等を取り上げている。2010～2011年にかけてロンドン滞在。ロンドン大学ゴールドスミス校クロスセクター&コミュニティー・アーツコースにて修士号取得。
<http://www.edg.or.jp/> (演劇デザインギルド)

■アーティストからのコメント

参加者の年齢も障害の種別もさまざま、時間、場所の条件もやや厳しいものでしたが、スタッフの熱意と適切なサポートに支えられ、3回目には演劇的な時間と空間を作り出し共有することができました。参加者のみなさんは、物語のなかで想像力を働かせて解決策を提案したり、役(動物役)として具体的な動きで伝えたり、相手役のアクションに反応して行動したり、物語を楽しみながら表現してくれました。個々の参加者の潜在的な力の一端が垣間見え、その魅力と輝きに出会うことができました。そういう時間を共有できることは無上の喜びです。(花崎攝)

■福祉施設からのコメント

今回演劇体験のお話をいただいた時、利用者が演劇をできるか、楽しんで参加できるかなど不安な部分はありました。ですが、飛行船にあったプログラムにさせていただき利用者がとても楽しんで参加している様子が見え、うかがえました。まず、興味を示しやすい動物の演劇にさせていただきました。1日目は動物の真似などから入り、2日目は群れでの行動。3日目は少し物語を加えてと段階を踏んで指導していただけたのが良かったと思います。今までのレクリエーションにおいて実施したことがない内容でしたので、利用者の反応や表情など新しい発見もあり大変有意義な体験となりました。(渡邊皇太)





ダンス 光の丘×向雲太郎 そのままの身体と向き合う

光の丘は、横浜市旭区にある障害者支援施設です。
主に、知的障害のある20～60代の方を支援しています。
今回は、普段から音楽に合わせて体を動かすプログラムに参加している利用者の皆さんを対象に、舞踏家・向雲太郎さんとダンスのワークショップを行いました。
ワークショップは全3回で、2017年11月、12月、2018年1月に1回ずつ開催。
「今回は私のほうが、利用者の皆さんから舞踏を勉強させてもらった」
そう雲太郎さんは語ります。
ひとりひとりと真摯に向き合いながら、それぞれの身体、
そして動きを味わう時間となりました。



1日目 身体をほぐす

初回の今回は、お互いのことを知り合う時間となりました。靴を脱ぎ、裸足になって寝ころびます。心も身体もからっぽになるように感覚を開きます。そして、雲太郎さんとアシスタントのみなさんが、それぞれの身体を揺らします。緊張気味の身体が少しずつほぐれ、緩んでいきます。その後は、立ち上がって足と顔でじゃんけんをしたり、動物になったりして身体をさらにほぐしていきました。普段の生活の中ではなかなか動かない身体の部分にじっくり丁寧に向き合います。休憩をはさんで、二人組で大きな紙を持ち、その紙のように動いたり、紙と一緒に踊ったりしました。最後は、軽快なソウルミュージックにのせて自由に身体を動かして、音楽と踊りを楽しみました。

2日目 そのままであることを感じる

おもむろに「舞」、「踏」と書いてある二枚の半紙を取り出した雲太郎さん。「舞」、「踏」というふたつの字からイメージされる動きを、それぞれ皆さんに披露しました。「舞踏という言葉には、そのまま、ただそこに在ればいいという意味があります」と雲太郎さん。まずはただ歩いてみるのところからスタートしました。そして、2人1組になって互いの身体を揺らし合ったり、マッサージしたり。時間をかけて身体をほぐしてゆきました。この日は、半分ずつグループに分かれ、見られるということを行いました。雲太郎さんは「見

られる人は、何かをする必要はありません。『もしない時間』を作ってみましょう」と話します。見られる側にみなさんは、ただ座ってみたり、他の人の動きをモノマネしたり。やがて雲太郎さんが音楽を流し始めました。ただそこに居ることや、誰かを見るその眼差しが踊りになる、不思議な時間になりました。

3日目 身体と身体で向き合う

今日はみんなで床に寝転がるころからはじまりました。側で見学していた利用者の方が「これは何の体操？」と不思議がっています。「頭をからっぽにして呼吸してみよう」と雲太郎さん。最終日の今日は雲太郎さんと利用者さんとデュオを踊りました。雲太郎さんはひとりひとりに、踊りませんか？と身体で話しかけます。座ったまま、恥ずかしそうにうつむいてしまう人がいても、雲太郎さんは負けじと誘いをかけました。すると、一人が雲太郎さんの手をとり、円の中に躍り出ました。自然と拍手がおこります。「○○ちゃんがんばれ！」と応援する人も。ゆっくりと音楽が流れるなか、デュオは進みます。「舞踏というのは、原始的、人間が本来持っている動きのことをいいます。みなさんは、他人の視線なんて気にせず、そのままそこに居るのが得意です。今回は僕のほうが、みなさんから舞踏を学びました」と雲太郎さんは語り、ワークショップは終了しました。

■アーティストからのコメント

障害者という考えを捨てる。障害者という線引きを決してしないことが大切だと感じました。踊ることの楽しさ。コミュニケーションの多様性。言葉をつかうことの難しさ。イメージするということには個人差があるということ。言葉のないコミュニケーションというのもまたこだわりなんだと感じました。何かしなければならぬという考えを捨てる。踊りはこうあらねばならない。ワークショップはこうあらねばならないという常識を疑う。それでこそ舞踏の存在価値があるのだと感じました。(向雲太郎)

■福祉施設からのコメント

利用者のみなさんもはじめは緊張している様子で、何が始まるのかも分からなかったためか戸惑いを感じている様子が目立ちましたが、回を重ねる毎にリラックスして肩の力を抜いた状態で活動に参加できていたと思います。人数もある程度多い方が、ワイワイ出来て良いのだと感じました。いつもと違う活動をする機会を頂けたことで、新鮮な気持ちで思うままに身体を動かすことが出来ていたと思います。(西山枝里、林美奈子)

光の丘×向雲太郎
そのままの身体と向き合う

期間：2017年11月10日(金)、12月8日(金)、
2018年1月12日(金) (計3回)

時間：13:45～14:45

参加者：1日目：8名、2日目：14名、3日目：
19名

施設名：光の丘

運営法人名：社会福祉法人白根学園

施設種別：障害者支援施設

住所：神奈川県横浜市旭区白根7-10-6

URL:<http://www.shirane.or.jp/facilities/hikarinooka/>

アーティスト：向雲太郎(舞踏家)

アシスタント：新宅一平、酒井直之、鈴木清貴

むかい・くもたろう

1994年舞踏カンパニー大駱駝艦に入団。舞踏家、鷹赤兒に師事。以降、全ての本公演に出演。1995年伊藤キム“Dead and Alive”初演参加、1999年より戌井昭人率いる鉄割アルパトロスケットに参加、2001年より大駱駝艦の本拠地「壺中天」に於いて振付・演出作品の上演を開始。7作品を発表し10年間で国内7ヶ所のほか、アメリカなど海外4カ国、6ヶ所で上演。2012年大駱駝艦退団、ソロ活動を開始。2015年『ふたつの太陽』にてカンパニー“デュ社・Deux Shrine”を旗揚げ。舞踏カンパニー大駱駝艦の基本理念である「この世に生まれたことこそを大いなる才能とする」という思想を踏まえつつ踊りとは何か？新しい舞台表現とはどういうものか？と問い続けながら、面白いということにこだわり作品を創り続けるという活動を続けている。

<http://www.soulplaying.info/>





ダンス

Y S K作業所×上村なおか 自分とみんなの身体に気付く

Y S K作業所は、横浜市神奈川区にある地域活動支援センターです。主に知的障害のある女性 15 名程度が、エプロンやふきンを縫うなどの作業を日々されています。今回は、普段は動かさない身体に目を向けるような取組をすることになりました。はじめは緊張していたり、何が起るのかと不安がっていた利用者のみなさんでしたが、回を重ねるごとにひとりひとりの体がゆっくりとほぐれていくのが感じられました。ダンサーの上村さんが、ひとりひとりにあわせた声かけや提案を行い、それぞれの人との間に濃密なコミュニケーションが出来上がっていきました。職員のみなさんの温かな雰囲気もあって、利用者のみなさんから繊細なそして力強い動きがいくつも出てきていました。



1日目 ひとりひとりと知りあう

ダンサーの上村なおかとメンバーのみなさんが初めて出会う初回は、身体でごあいさつするところから始まりました。上村さんがひとりひとりと身体を触れ合わせていきます。そっと指をのぼして上村さんの身体に触れる人、大胆に寝っ転がる人、勇気をもって一歩を踏み出した人、それぞれの身体の会話がありました。初回ということもあり、少し緊張感がある状態でしたが、集中力を持ってやりとりの様子を見守っていました。たっぷり時間をとってやりとりした後は、音楽にあわせてみんなで自由に身体を動かしました。自然とごあいさつの時の身体の動きが取り入れられて、お互いの身体にたくさん触れるひとときとなりました。

2日目 動きを楽しむ

全員で円になって椅子に座り、ストレッチを始めるところからゆっくり始まります。足の動きが出てきたので、「靴下であいさつをしていきましょう」と足を使っただけのあいさつを促していく上村さん。利用者の方の動きを拾い上げていきます。次に円になって、誰かのところにいるような動きをしながら移動します。次第に円の中心で誰かが何かをやり始めると、みんなでその真似をし始め、みんなで場をつくっていきま

た。最後に、上村さんが来る途中で拾ってきたという落ち葉をパラパラと落とし、落ち葉の道をひとりひとり思い思いの身体の動きで散歩しました。誰かが自然にやった動きがみんなに伝わる、やさしい雰囲気にあふれる時間になりました。

3日目 身体での関わり方を探る

「今日はこのタンバリンを、身体のいろんな部分で叩いてみましょう」と、タンバリンを利用者のみなさんに手渡す上村さん。上村さんがひとりずつ声を掛けて、タンバリンを高く掲げたり低くしたりして、利用者の方のみなさんの、普段しないような身体の動きを引き出していきます。次に、上村さんのタンバリンに合わせて身体のいろんな部分を使い、誰かの身体にタッチして止まります。なかには、誰もくっついていない人がいないか、周りに気を配りながら踊る利用者の方もいらっしゃいました。最後に、利用者の方のみなさんが普段行っている作業の動きも用いて、音楽を流しながら自由に踊ります。次第にゆるやかなお祭りのような雰囲気が出ていき、一体感が生まれて、おしまいになりました。

■アーティストからのコメント

Y S K作業所は日常の生活や仕事と地続きになっている場でもあり、その作業内容とメンバーが醸し出すとても温かな雰囲気や満ちていて、訪れるのが毎回楽しみでした。ワークショップを重ねる毎に静かな面とともに情熱的な面も現れ、それぞれの方が持つ人生と身体史のようなものが垣間みられ、みんなが密かに持っている冒険心がこぼれるように出て来たのが印象的でした。また機会を持つことができれば、さらにまだ隠れている身体が語りだすのではないかと予感しています。(上村なおか)

■福祉施設からのコメント

全3回の活動の中で、普段の仕事に見えなかったそれぞれの個性に新たに気付くことができました。身体を上手に動かせなくても表現力は人一倍豊かだったり、仕事上手の人が意外に固くなってしまったりと新鮮な発見がありました。メンバーたちも回を重ねるごとに何をやるのか期待が高まっていたようで、気分よく身体を動かしたりリラックスする時間が持てたのでは、と思います。(荒井すみい)

Y S K作業所×上村なおか
自分とみんなの身体に気付く

期間：2017年10月19日(木)、11月20日(月)、
12月5日(火) (計3回)

時間：10:30～11:30

参加者：1日目：10名、2日目：10名、3日目：
10名

施設名：Y S K作業所

運営法人名：N P O法人たんまち福祉活動ホ
ーム

施設種別：地域活動支援センター

住所：横浜市神奈川区反町1-7-3アール2F

アーティスト：上村なおか(ダンサー)

うえむら・なおか

石川県金沢市生まれ。5才よりバレエを始める。1991年お茶の水女子大学舞踊教育学科卒業。在学中の89年より木佐貫邦子に師事。91年木佐貫主宰のダンスグループ「neó」の創立メンバーに参加。以降、数多くの木佐貫作品に出演する。98年より笠井勲に師事、01年より自主企画ソロダンス公演をスタート、これまでに5作を発表。国内外で公演を行う。詩人、写真家、音楽家など他のジャンルのアーティストとの活動やダンサーとしてのオペラへの出演など精力的に展開している。身体表現教室やダンスクラス、各地での様々な世代へのワークショップを通して、身体の発見と冒険を実践中。身体の力とイメージの力を目覚めさせるべく奮闘している。近年では振付家としても活動の幅を広げている。02年度、文化庁新進芸術家国内研修制度研修員。04年度、第36回舞踊批評家協会新人賞を受賞。05年度より桜美林大学総合文化学群にて非常勤講師を勤める。

<http://naoka.jp/>





音楽 まどか工房×即興からめーる団 ひとりひとりの個性で歌づくり

まどか工房は、横浜市旭区にある障害者サービス事業所です。主に知的障害を持った方が仕事を通してそれぞれの実力や得意分野を発揮できるように、個性を大切にしながら、日々通われています。忙しい中でも、ゆっくり立ち止まって表現に向き合う時間を大切にしたいという職員のみなさんの想いから、利用者のみなさんの好きな音楽の取組を行うことになりました。音楽ユニットの即興からめーる団のみなさんと一緒に、3つの事業所ごとに2回ずつ伺いました。利用者のみなさんのなかから出てくる言葉とメロディで歌づくりを行い、最後には、職員のみなさんも加わってみんなで合唱。工房ごとのオリジナルソングが完成しました。



1日目 普段の様子から言葉を見つける

クッキーづくりを行う施設「まどか第1」からスタートです。自己紹介の演奏やゲームのあと、「世界にひとつだけみなさんの歌をつくりましょう」と、歌づくりが始まっていきます。みなさんから、名物のクッキーづくりの工程を詳しく聞いて、歌詞に反映します。鮮やかな歌づくりに、「どんな歌ができるんだろう?」と、みなさんワクワクした面持ちでした。午後は、お弁当づくりを行う施設「まどか第3」で取り組みました。歌唱の合間に突然ものまねゲームが始まり、みんなであてっこします。みなさん大盛り上がり。熱気そのままに歌づくりに。みなさんの好きなものを繋げて歌詞にし、ひとつひとつメロディをつけていきます。いくつもアイデアが飛び出しました。

2日目 アイデアを盛り込む

午前は喫茶・箱折りなどの作業を行う施設「まどか第2」の初回です。利用者みなさんのアイデアから歌詞が出来ます。「メロディどうしよう?」との即興からめーる団のお二人の呼び掛けに利用者みなさんがなんとなくハミングで歌ったものを、すかさず拾っていきます。午後はまどか第2の2回目です。歌づくりの続きを行っ

ていきますが、途中、なかなか歌詞が出なくなる時があります。即興からめーる団のお二人が「まどか工房はみんなにとってどんな場所だろう?」と問いかけると、利用者みなさんからは「落ち着く」との言葉が。これには職員みなさんの顔もほころびます。最後には、完成した曲をみんなで楽器を持って大合唱。まどか工房を想う気持ちが溢れる曲になりました。

3日目 つくった歌を楽しむ

まどか第2の2回目。即興からめーる団のお二人が、利用者みなさんのところに行き、うたづくりのヒントを探ります。お二人の勢いにのせられて、ぼつりぼつりと言葉やメロディが出てきます。最後には、みなさんの好きな音楽がいっぱい詰まった歌になりました。職員の浦郷さんもギターを取り出しみんなで合唱しました。午後は、ラップ好きの利用者さんがいるまどか第3の2回目です。歌の間に、なにをしてもいい自由なパートを入れます。すかさず職員みなさんが、掃除用具などマイクに見立てられそうなものを利用者みなさんに渡し、ラップやエアギターの即興パフォーマンスに。まるでお祭りのような雰囲気になりました。エネルギー溢れる自分たちの歌に、大満足の様子でした。

■アーティストからのコメント

今回、ワークショップの対象となったのは利用者さんではありますが、歌に表れた仲間への親しみや職員みなさんへの感謝を見るにつけ、職員みなさんが一緒に関わっていただいたことでできたワークショップであり、音楽であったと実感しました。(赤羽美希) 障害のある方とのうたづくりということで、歌詞の言葉やメロディーが出やすいように、インタビュー形式にして楽しみながらキーワードを聞き出したり、普段仕事で使っている道具を出して実演してもらいながら話をしたりいろいろと工夫しました。まどか工房のみなさんはとても表現豊かで、それぞれの個性が出た3曲になりました。出来た歌をいろいろな場面で歌ってもらえたら幸いです。(正木恵子)

■福祉施設からのコメント

日頃より音楽が好きな利用者が多いとは実感していましたが、そこに創作ということが加わるとどうなるのか。ワークショップをはじめるまでは、日々一緒に過ごしても見えない部分が多かったです。その不安さから、意見がでるだろうか?という思いで、事前にどんな歌にしたいかのアンケートをとることにしました。けれどそうしなくても山のように意見がみんなから出たこと、まさかのメロディーラインをこちらが想定していない利用者の方から出てきたことなどで、音楽の持つ力、障害のある人の創作する力(自由さ、奔放さも含め)にはじめて触れることになりました。このことは私たちの主に行う生産活動の視点から見えないものであると思います。(浦郷大佑)

まどか工房×即興からめーる団
ひとりひとりの個性で歌づくり

期間：2017年11月17日(金)、11月24日(金)、
12月1日(金) (計3回)

時間：10:00～11:30、13:30～15:00

参加者：1日目：20名、2日目：21名、3日目：
20名

施設名：まどか工房

運営法人名：社会福祉法人夢21

施設種別：障害者サービス事業所(生活介護)

住所：神奈川県横浜市旭区本宿町18-14

アーティスト：即興からめーる団(音楽ユニット)

そっきょう・からめーるだん

音楽家・赤羽美希(あかはね・みき)と打楽器奏者・
正木恵子(まさき・けいこ)による音楽ユニット。2006年より活動を開始。うたづくり、音あそび、楽器を使った音楽ワークショップを企画・実践するほか、コンサートホールやライブハウス、公共施設、学校等での演奏活動も行っている。うたの住む家プロジェクト主催。既成概念にとらわれない、自由で面白い作品づくりと、ワークショップに参加した人、その一人一人がいなければ成り立ち得ないような音楽作りを目指している。

<http://improkaram.blogspot.jp/>





音楽 よこはまりバーサイド泉Ⅲ×即興からめーる団

音を見つける、音楽を楽しむ

よこはまりバーサイド泉Ⅲのぞみ・ひまわりは、横浜市泉区にある生活介護施設です。成人が通う「のぞみ」と、児童の放課後デイ事業を行う「ひまわり」が同敷地内にあり、知的障害や身体障害のある方が1日25名ほど通われています。利用者のみなさんのことをよく知る職員のみなさんと、音楽を体験して楽しめるワークショップを「のぞみ」と「ひまわり」それぞれで行いました。

音のせかいに浸る

音楽ユニット・即興からめーる団と利用者のみなさんの音楽の時間が始まります。まずは、自己紹介代わりに演奏する即興からめーる団のお二人。少し緊張気味のみなさんでしたが、即興からめーる団のお二人の鮮やかな演奏に拍手と歓声が巻き起こります。別の曲では、楽器を配って利用者のみなさんに思い思いに鳴らしてもらいました。次第に一体感が生まれていきました。午後は、利用者のみなさんや職員のみなさんから続々と歌のリクエストが挙がります。「メンバーの中に今年新成人になった人がいるから…」と、仲間を思いやってお祝いの曲を挙げる方もいらっしゃいました。のぞみでの活動を終え、子どもたちのいるひまわりへ。即興からめーる団のお二人が「海の音を持ってきました」と、波音のように聞こえる楽器・オーシャンドラムをひとりずつに届けてみんなで音色を聴きました。珍しい音色に、児童のみなさんからは「うわぁ」と声もれます。楽器を使ってみんなで演奏し、音に浸る心地よい時間になりました。

■アーティストからのコメント

みなさんの表情から音楽を喜んでくださっていることが伝わってきて、とても嬉しく思いました。積極的にリクエストをしてくださったり、仲間を想っての提案をしてくださった場面は、感動的でした。私たちは重度身体障害の方々の関わりがあまりなく、できることや好みを把握する困難さがありました。しかし、普段サポートする職員さんが、気持ちの機微を汲み取って必要なアシストをしてくださったり、それぞれのみなさんにあった楽器の選択をしてくださったおかげで、自発的な表現を生み出すことができたと感じます。(赤羽美希) /少しの力でも鳴らしやすい楽器や参加しやすい活動を考えました。いざ始まり音が鳴ると、皆さんすぐ反応していることに驚き、音の力を感じました。めいっばい全身を使って積極的に参加する姿が見られた場面では、私も胸が熱くなりました。(正木恵子)

■福祉施設からのコメント

普段できない活動内容(鑑賞まで参加型)で、貴重な体験ができました。限られた活動の中で、それぞれが持つ強みを大いに活かした活動だったと思います。普段目にすることがない楽器に触れ、音を聴いたり奏することで、その人の好きにあった楽器や音を知る機会を得られました。利用者さんの笑顔がたくさんみられて良かったです。また、即興からめーる団のみなさんのアプローチが勉強になりました。外部の方が行ってくれることで特別感があり、職員は利用者にとっぴり関わることが出来ました。(中尾知子、伊藤恵美)

期間：2018年1月10日(水)
時間：10:15～11:10、13:40～14:30、14:30～15:00
参加者：26名
施設名：よこはまりバーサイド泉Ⅲのぞみ・ひまわり
アーティスト：即興からめーる団(音楽ユニット)
施設情報：リバーサイド泉Ⅲのぞみ・ひまわり
運営法人名：社会福祉法人横浜市社会事業協会
施設種別：障害福祉サービス事業所
(生活介護・放課後児童デイサービス)
住所：横浜市泉区下飯田町 811-6 番地
URL:http://www.jsjk.jp/facilities/facilities_09.html

そっきょう・からめーるだん
(プロフィールはP15参照)



音楽 ザ・PUSH × 西井夕紀子 それぞれの思いをつむぐ

ザ・PUSHはcafe ペガサス、浦島共同作業所、グループホームせせらぎ、地域活動支援センターひふみに通う人たちを中心に発足されたバンドグループです。それぞれに歌いたい曲を持ちよったり、オリジナルの歌をつくったりして、楽しんでいます。今回は、作曲家の西井夕紀子さんと一緒に、2018年の3月末にある発表会に向け、一人ひとりのやりたいことをつなぎあわせたミュージカルをつくることになりました。

1日目 やりたいことを出してみる

西井さんとプッシュのみなさんが初めて創作活動を行う時間です。この日は、3月のコンサートにむけてどんなことをしたいか、相談するところから始まりました。こんな歌が歌いたい、あんなお話はどうか、こういう振り付けを考えてみたんだけど、などみなさんからはどんどんアイデアが出てきます。魅力的なアイデアをどうやって盛り込んでいくのか、これから考えていくことになりました。

2日目 みんなの思いをつなげたミュージカル

今日は、ミュージカルの詳細を考えていくプッシュの皆さん。ミュージカルのテーマは「ともに生きる」で、時間は30分くらいにすることが決まりました。今回はじめてプッシュに参加した方は、お気に入りの歌を熱唱。ほか、楽器の弾けるバンド組は、練習が仕上がったという曲を演奏してくれました。みなさんの成果発表を見て、ふむふむと考え込む西井さん。「タイトルはどうしますか？」と尋ねると、プッシュの皆さんは「プッシュでフィッシュがいいんじゃないか」ということで、プッシュでフィッシュ、一体どんなミュージカルになるのでしょうか。



期間：2018年1月16日（火）、2月27日（火）、3月29日（火）、3月31日（土）
時間：16:00～17:00
参加者：各回10名前後
団体名：ザ・PUSH
アーティスト：西井夕紀子（作曲家）

にしい・ゆきこ

1983年生まれ。作曲家。演劇やダンス、映画などへの楽曲提供を行う。主な参加作品に、東京国際芸術祭（現フェスティバル/トーキョー）参加演劇作品『アトミック・サバイバー ーワーニヤの子どもたちー』（演出：阿部初美、2007年）、ダンス『わたしたちは生きて、塵』（西井幸菜、2012年）、ダンス『秘密も、うろ覚え。』（モモンガ・コンプレックス、2013年）、ドキュメンタリー映画『おとなのかかく』（Studio Q-Li、2014年）、ドキュメンタリー映画『筑波海軍航空隊』（プロジェクト茨城、2015年）、野外ダンス公演『森の中のモモンガ・コンプレックス』（モモンガ・コンプレックス、2016年）、一部ホーンアレンジメントで参加したアルバムにcero『My Lost City』がある。東京芸術大学音楽学部音楽環境創造学科卒業、同大学音楽研究科音楽音響創造分野修了。

障害福祉と文化芸術の関わりを考える勉強会

今年度も、多種多様な立場から障害福祉、芸術を考えている方々をゲストに、全4回の勉強会を行いました。アーティストやコーディネーター、障害福祉や文化芸術関係者など、さまざまなバックグラウンドを持つ方にご参加いただきました。ここからは、その勉強会の様子を、また、平成30年3月に行われた報告会の様子をご紹介します。



作業所から見える風景、地域とつながる方法

ゲスト：鈴木励滋 (地域作業所カプカプ 所長)

■「カプカプーズ」が地域と繋がること

横浜市旭区にある地域作業所カプカプの所長である、鈴木励滋さん。この回では、知的障害などを持つ方が働くカプカプでの実践を通して見えてきた地域とのつながりやアートとの関係性を、具体的な取組み例を交えてご紹介いただきました。

初めに、なぜ地域とつながるのか、ということについてお話がありました。例えばカプカプでは、近隣にある高齢者向けのサービスを行う事業所と連携し、お互いの現場でつながった困りごとのある高齢者や障害者のことを相談し合う関係ができていたり、旭区内の障害者施設と、施設で行われている製品づくりや当事者同士の交流について考える場があったりするそうです。

こうした関係づくりにより障害の有無に関わらず「困った人がいたら助け合う」地域をつくり、またそういった地域づくりの一員となる仲間をつくるのが、カプカプに通ってくるメンバーをはじめ障害のある人を守ることに繋がると鈴木さんは話します。

そもそも鈴木さんの考える「障害」とは、機能やかたちに違いがあったりできないことや苦手なことがあったりするために社会の中で力関係や不利益が生まれること、つまり関係の問題であるといえます。カプカプでは、この関係や、さらにその根底にある価値観を変えていけるような活動を続けてきました。

例えばカプカプを利用する障害のある皆さん、通称「カプカプーズ」の仕事には、製菓や手芸品づくりなどの生産活動に限らず、似顔絵を描きながらお客さんとの会話を楽しんだり、「いらっしゃいませ」の代わりに「かっとばせ」と声をかけ、最終的には道行く人を応援するリサイクルショップの接客など、物やお金が行き来するだけではないユニークな仕事があります。ひとりひとりの魅力を生かすそれぞれの仕事が、カプカプーズとカプカプを訪れる人たちとの関係を生み出していることが伝わってきます。

■逸脱したものを許容する「ザツゼン」さ

役に立つか否かという価値観が主流となっている社会のなかで、福祉の現場にも障害のある人に対して「こうあるべき」という指導や訓練が行われがちであると、鈴木さんは指摘します。

もちろんそうした指導や訓練が合う方もいますが、そうではない人に対して許容する場があることで、居場所の選択肢が広がり、生きづらさをゆるめることにつながると考えます。

カプカプでは、ダンスや絵のワークショップが長年にわたって続けられてきましたが、こうしたアートの取り組みが、身体にしみついている「こうあるべき」という意識を取り除いていることが感じられるといいます。そして、委縮しない、開かれた身体をもつことが、自由な接客や日常のふるまいにつながっていきます。アートは多様性を肯定し、価値観を揺さぶる手立てとなるのではないかとアートの可能性について話します。

「こうあるべき」といった整然とした世界に対し、逸脱したものを許容し自分自身や関係を拡張させる世界を、鈴木さんは「ザツゼン」と表現します。そしてそれは、障害がある人だけでなく、すべての人の生きづらさをゆるめるのだと主張します。

「ザツゼン」という言葉からは、枠や境界線がなく思わぬものが隣り合ったり、フォーカスの当て方によって発見があったりといった、自由で豊かな風景がイメージされます。

閉じて抱え込まないことで広がる可能性は、どんな人、どんな場にもあり得るのだと、新たな視点を受け渡されたようなお話でした。

日時：2017年9月20日(水) 19:00-20:30
場所：STスポット (横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル 地下1F) 参加者：41名
地域作業所カプカプ <http://kapukapu.org/hikarigaoka/>

鈴木励滋 (すずき れいじ)

1973年群馬県生まれ。1997年から地域作業所「カプカプ」の所長を務める。『生きるための試行エイブル・アートの実験』(フィルムアート社、2010年)や『季刊ピープルズ・プラン』(ピープルズ・プラン研究所)に寄稿するほか、演劇に関する批評や記事を『ユリイカ』(青土社)や『月刊ローソンチケット』、劇団ハイバイや劇団サンプルのパンフレットなどに執筆。『ソーシャルアート 障害のある人とアートで社会を変える』(学芸出版社、2016年)には、師匠である政治社会学の栗原彬氏との対談が掲載されている。



障害のある人たちの日々の生活に触れる ゲスト：中村麻美（地域活動支援センター ひふみ 施設長）

■ひふみに通う人たち

地域活動支援センターひふみには精神障害を抱える人が多く通っていることもあり、当日は特にその部分に焦点を当ててお話しいただきました。

まずは精神障害を取り巻く現状として「長期入院」「社会復帰と就労」「リハビリとピア活動」というキーワードが挙げられました。1年以上精神科に入院している状態を長期入院と呼び、日本には18.5万人（2014年時点）と世界の中でも特に多くの人が長期入院していることが問題視されています。背景には、家族が退院後の受け入れを拒否していたり、入院中に賃貸契約が更新できずに住む家がなくなってしまうといった、本人の状態ではなく周囲の環境が要因で入院が長引いてしまう「社会的入院」の問題が大きく、障害への理解に課題があることが感じられます。

その他にも、精神障害は生まれつきあるものではなく途中から抱えるものであるため、自分自身の変化を受容する必要があるといったハードルについてや、同じ病気を経験した人が施設の職員などとして仲間を支えるピア活動についてなど、精神障害ならではの生きづらさや支え方があることが話されました。

■ひふみという「居場所」

続いて話題はひふみでの日々に移ります。「ひふみでは、思いついたことをやるということを大切に、行き当たりばつりの生活をあえてやってみている」と中村さんは話します。習字をしたり、みんなでメニューを相談して宅配ピザを注文したり、フォークソングを歌ったり……。それは、目標・目的主義に陥らず、生活に余白をつくることです。「周囲はがんばる姿を求めがち。本人も演じてしまうが、だめな部分もひっくるめて生活することが大事」という言葉に、当事者を支える周囲と本人との関係のあり方を考えさせられました。

ひふみにある生活の余白は、地域の人も受け入れます。ひふみの周辺には、高齢者施設や学校が近くにあり、高齢者や子どもたちが遊びに来ることもあるそうです。認知症や発達障害を抱える方もいる中で、「みんな何かしらのしんどさを持っている。仲間意識をどこまで広げられるか」という視点で、地域の中でひふみという場を営み続けています。例として、「死にたい」とよく口にしているあるひふみのメンバーが、遊びに来ていたお客さんのぼやきを親身に聞いていたというエピソードを挙げられ、他人のしんどさに目を向けることで、自身にも変化が起こるきっかけとなることが感じられました。

中村さんがこうした居場所づくりを続けている背景には、自身の経験が影響しているといいます。学生の時に世田谷パブリックシアターで行われた演劇ワークショップに参加した中村さんは、「世の中にはいろんな人がいる」ということを実感し、多感だった当時の生きづらさがほぐされる思いだったそうです。突拍子のない行動をする大人も、その場の和を乱す子どもも『そこにいていい』と受け入れる劇場は、いろんな人にとっての居場所でした。

「居場所が用意されていたのではなく、一部分にしてくれた」と、そこにいるひとが、一緒に場をかたち作る一員として存在できることが、居場所だと感じさせていたのではないかと中村さんは考えます。今ひふみで起こっている“行き当たりばつり”な日々や、自分もしんどさを抱えながらもつながりを持つことで誰かの居場所になっている風景につながっていることが感じられるエピソードです。

最後に少人数のグループに分かれて感想を話し合いましたが、終了時間を過ぎても多くの人が残り、話が尽きることがない様子でした。今日の話を受けて、それぞれがいま関わっている現場の作り方や、そこにいる人、自分自身の関わりなどを見つめる新たな視点を得られた、という参加者の感想が多く聞かれました。

ひふみでの障害のある人たちの日々の生活にふれることを通して、中村さんの考えるアート『いかに枠組みを外れるたのしみを感じられるか』に思いを巡らせる機会になったのではないかと思います。

日時：2017年10月18日（水）19:00-20:30

場所：地域活動支援センター ひふみ（横浜市神奈川区六角橋 6-2-13） 参加者：32名

中村 麻美（なかむら あさみ）

2012年より横浜市神奈川区にある「地域活動支援センターひふみ」に勤務。精神障害のある人たちの日中活動の場を運営している。障害福祉に関わる以前は、2005～2012年まで世田谷パブリックシアターの学芸に所属し、劇場内及び地域におけるワークショップ活動を主に担当していた。劇場勤務時代において体得した地域の様々な人たちとの関わりや、場の作り方などを、今現在の障害福祉の現場において活かしつつ、日々試行錯誤している。



みんなが楽しめる美術館って？ ゲスト：立浪 佐和子（横須賀美術館 学芸員）

■すべての人に開かれた美術館

2007年にオープンした横須賀美術館は、2017年で10周年を迎えます。開館以来、展覧会だけでなく、教育普及事業の一環として、福祉関連事業にも力を入れられてきたそうです。この日は、手探りで進めて来られた、教育普及活動を支える5つの柱の中で、「すべての人に開かれた美術館」を目指す福祉活動の展開について主にお話をいただきました。

開館当初は、「床や室内を汚すことを気にせず芸術活動をしたい」などの要望に、設備的・人的に対応が難しかったことがあったそうで、そこから自分たちができるサポートを考え、今のかたちになったと言います。

最初にご紹介いただいたのは、特別支援学校で行われた出前授業です。この授業では、特別支援学校の児童生徒が、横須賀美術館に出かける前に、アートをどう鑑賞すれば良いのかレクチャーを受けます。一見とっつきづらい美術作品の、多様な見方を提示しながら、美術館の楽しさを伝える授業を行い、実際の鑑賞へとつなげていきます。

また、開館当初から続けている、障害児向けワークショップの「みんなのアトリエ 2017」についてもご紹介いただきました。参加対象は、20歳以下の障害児者というだけで、障害の程度は問いません。また、普段はケアをする側でもあるご兄弟も積極的に誘って、誰でも参加できる枠組みを作りました。

年に1～2回は、障害のある方を対象としたワークショップやパフォーマンスも開催されています。ダンスや音楽、人形劇など、テーマもさまざまに開催し、障害者とアーティストの出会いの場づくりを行ってきました。2005年から行われている福祉講演会では、「視覚障害者の美術鑑賞」をひとつの切り口にして、「触察本」の先行事例や、「さわられる美術作品」を触覚によって鑑賞する活動について、海外のすぐれた事例を紹介してきました。

一方で、紹介はしてきたものの、横須賀美術館で実際どのように取り入れていくかということについては、まだまだこれからだと話します。見ればわかる、という美術のあり方から、それぞれの人に合わせた鑑賞の方法を提示するために、どのようなやり方をすれば、何を排除すれば絵の本質に近づくのだろうかという模索は続いています。

「手探りでやってきた10年、完成したかたちはありません。決まったひとつのかたちはなく、たくさんメニューがあって、その人にあったものを提示できることが理想です」と、立浪さんは語ります。

■障害がある方も、いつでも来てください

今後の課題として、地域の福祉施設との連携について挙げられました。さまざまな取組に、横須賀市内からの参加者が少ないこともあり、横須賀美術館では市内の障害福祉のコミュニティへのアプローチを始めています。

また、福祉施設の方とコミュニケーションをとっていく中で、「いつでも来てください」とお誘いすると、「え、いいんですか?!」と驚かれる場面があり、美術館と福祉施設双方に遠慮している実情があることに気付いたそうです。

「大きい潮流に流されず、できることや必要とされていることを無期限に提供できるようになりたい」という立浪さんの言葉に、刹那的に終わるのではない、障害福祉・文化芸術の両者にとって、長く居心地のよい協働のあり方について考えさせられました。

その後は、美術館で工夫されて作ってらっしゃるワークシートを用いながら、館内をめぐり、最後に少人数に分かれて感想について話し合いました。障害福祉や文化芸術の双方の悩みや、協働のあり方について、興味深い意見が飛び交いました。普段は出会う機会が多いとはいえ、障害福祉関係者や文化芸術関係者が出会い、対話を重ねること、その積み重ねの重要性を改めて感じました。



日時：2017年11月16日（木）13:30-15:30

場所：横須賀美術館（神奈川県横須賀市鴨居4-1） 参加者：26名
横須賀美術館 <http://www.yokosuka-moa.jp/>

立浪 佐和子（たちなみ さわこ）

金沢美術工芸大学大学院芸術学専攻修了。2005年より横須賀美術館学芸員。展覧会事業のほか、地域の学校や保育園との連携プログラム、福祉関連の普及事業を担当。昨年より神奈川県内の公立美術館の学芸員が集まり、美術館における社会包摂を考えるプロジェクト「マルバ（MULPA）」に参加。



舞台と観客の関係づくり～舞台手話通訳の現在

ゲスト：米内山陽子（劇作家 演出家 舞台手話通訳）

■演劇×手話のコラボレーション

この回は文化芸術関係者や福祉関係者だけでなく、手話通訳の方など手話に興味をお持ちの方もいらっしゃいました。

お話では、舞台手話通訳の役割、そして、聴覚だけでなくすべての障害をお持ちの方が観劇を楽しめる、インフラ整備の必要性についてもお話いただきました。

コーダ（聴こえない両親を持つ聴こえる人）である米内山さんは、物心ついた時から家でのお話が手話で、視覚言語（手話）と音声言語のバイリンガルとして育ちました。音声言語よりも先に視覚言語を発話したそうです。障害のある人とコラボレーションした演劇作品『血の婚礼』に参加したことがきっかけになり、演劇と手話を掛け合わせることができるのでは、と思ったことが、2011年からの舞台手話通訳活動のきっかけになったそうです。

舞台手話通訳は、舞台上で、聴覚に障害のある観客と作品を媒介する存在です。いわゆる手話通訳との違いは、聴こえない人に情報を伝えるだけでなく、俳優がどういう熱量や声色でセリフを言っているのか、というところまで伝えるところにあります。その性質上、作品や演出を理解する必要があり、俳優のようにチームの一員として、稽古から参加する場合もあります。



■舞台手話通訳は「情報保障」

しかし、作品に入り込むかたちの、舞台手話通訳の仕事への理解はまだまだ、と米内山さんは話します。上演中、舞台上にいるので、ときおり異物として見られてしまうことがあるそうです。また、聴こえない人にとっても、イメージしにくいところがあるようで、舞台手話通訳の存在を生活通訳（普段の生活のなかで病院や役所に行く時に同行する通訳）と同じようにイメージし、それならいいか、と舞台手話通訳付きの公演に足を運ぶことに繋がらなかったこともあったそうです。情報を届けることの難しさを挙げられています。

次に、舞台手話通訳をインフラの側面から見たときの話になりました。「舞台手話通訳は、情報保障であり、観客の作品へのアクセスを保障するものです。例えば劇場の主催事業のうち、1回は、舞台手話通訳付きの公演があるようになるといい」と、米内山さんは語ります。

その後は、少人数グループに分かれて感想について話し合いました。外国語のひとつのような感覚で、手話での表現を当たり前で捉えることが重要ではないか、という意見があったり、外国語から日本語への通訳をするときに、ただ情報を伝えるものだけでなく、文化と感覚の違いを乗り越えようとするものなのではないか、という意見が挙がりました。

手話を通じて、誰もが気軽に文化芸術の喜びを受け取るにはどうしたらいいのでしょうか。なかなか簡単に答えが出るものではないですが、文化や感覚の違いを乗り越えようとする舞台手話通訳のように、認識の違いを乗り越えて、理解を得ていく取組の必要性について、考えさせられる機会でした。

日時：2017年11月29日（水） 19:00-20:30

場所：S Tスポット（横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル 地下1F） 参加者：25名

米内山陽子（よないやまようこ）

ろうの両親の元に生まれたネイティブサイナー。1992年から俳優として演劇を始める。1999年に作・演出に転向。2011年に執筆した戯曲の公演で、小劇場初の舞台手話通訳に立つ。舞台を中心に手話翻訳、指導を行う。2012年にユニット「チタキヨ」を立ち上げ、劇場外での演劇を行っている。

調査研究事業

ヒアリング結果報告

ここでは、調査研究事業として行った、神奈川県内の障害福祉サービス事業所 17 か所、文化芸術団体 3 団体に対してのヒアリング結果をお伝えします。

(調査期間：2017 年 4 月 27 日～2018 年 3 月 16 日)

障害福祉サービス事業所、文化芸術団体ともにつながりについて、課題があるということがうかがえます。

それぞれの分野内につながりだけでなく、福祉と文化芸術を横断するようなネットワークの構築を今後も続けていきます。

【障害福祉サービス事業所】

■現在取り組んでいるまたはこれまで取り組んできた芸術等の活動

●ボランティアや利用者、職員を中心とした取組

- ・ボランティアと当事者が中心となって、ピアノコンサートや朗読会を企画実施している
- ・定期的に余暇活動やクラブ活動として、料理・文化・運動・美術・音楽・体操などのサークルに分かれて活動している
- ・作業が難しい人たち向けにちぎり絵などの活動をしている
- ・精神障害を理解してもらうための活動として、地域に出てダンスをしたり、映画製作を行ったりしてきた
- ・美術の取組が製品づくりにも生かされている

●外部講師を招いた取組

- ・定期的に講師を招いて音楽の取組を行っている
- ・付き合いのある喫茶店で講師を招いてワークショップを行っている
- ・立ち上げ当初から関わりのある講師による美術教室を実施。障害者スポーツ文化センター 横浜ラポールの作品展や地域の施設で展示をしている
- ・施設のお祭りにアーティストを招いた
- ・利用者から毎月徴収し、外部講師への謝礼もその中から支払っている
- ・講師と対等の付き合いをしたいという思いから、必ず謝金を支払うようにしている

■今後の課題、要望

- ・地域で障害者が活躍する姿が、まちの風景になるように当たり前になってほしい
- ・社会と障害者がポジティブなイメージで関わる接点として芸術活動に取り組みたい
- ・身体障害など他の障害者に比べて、精神障害者への理解が普及しづらい。もっと精神障害者の存在を社会に示したい
- ・利用者の高齢化に伴い、活動内容の見直しが必要となってきている。また、ボランティアが高齢化し、若い世代の参入がないことが課題
- ・職員によって活動内容が左右される。重症心身障害児者向けの活動内容を模索している
- ・毎年展示をしているが、施設から会場が遠いため利用者が見に出かけることが難しい
- ・これまで施設全体で取り組むことが多かったため、個人の表現に注目するワークショップに興味がある
- ・外部講師を招いた活動は、講師料が課題。できればボランティアに頼みたい
- ・施設同士が連携して作品展などのイベントを開催したいが、つながりがつづけていない
- ・ケアなどの関係で時間と人員配置に制限があることが課題

【文化芸術団体】

■現在取り組んでいるまたはこれまで取り組んできた障害者等との芸術活動

- ・障害者や高齢者、子ども連れなどさまざまな人が訪れることを想定した対応を考えている。作品などに触る機会の提供や、参加型の企画など
- ・乳幼児連れが気がねなく参加できるようなコンサートや、子ども向けのワークショップ
- ・視覚障害者との鑑賞ワークショップ
- ・定期的に障害のある子ども向けワークショップを開催。また、障害者も健常者もともに参加できるワークショップや、海外から講師を招いた福祉まつわりの講演会を開催
- ・障害者とアーティストの協働で、小規模のアートプロジェクトを行う予定
- ・ワークショップで一般参加を募った場合、適切な対応方法が分からずに、どうするのが良かったのか、職員間でも悩んでいる

■今後の課題、要望

- ・障害特性を踏まえた体験型事業の研修
- ・施設の外での取組の方法などを共有する他団体との情報交換の機会
- ・プログラムの内容が固定化されてきているなど発展が求められている
- ・ハード面やアクセスなど見えてきた問題点・解決策の整理
- ・他分野の専門家とつながる機会があると良い

ヒアリング先一覧

	地域	ヒアリング先	運営	施設種別	障害種別	ヒアリング日
障害福祉 サービス事業所	横浜市 旭区	旭区地域生活支援拠点 ほっとぽっと	特定非営利活動法人 共に歩む市民の会	精神障害者 生活支援センター	精神	2017. 4. 27
	横浜市 戸塚区	スマイルワークス	株式会社 スマイルワン	障害者サービス事業所 (就労継続B型)	知的	2017. 5. 1
	横浜市 磯子区	スペース杉田	特定非営利活動法人 ゆっくりいそご	地域活動支援センター	精神	2017. 5. 1
	横浜市 栄区	リエゾン笠間	社会福祉法人 同愛会	障害者支援施設	身体	2017. 5. 2
	横浜市 旭区	光の丘	社会福祉法人 白根学園	障害者支援施設	知的	2017. 5. 2
	横浜市 神奈川区	Y S K 作業所	N P O 法人 たんまち福祉 活動ホーム	地域活動支援センター	知的	2017. 5. 9
	横浜市 旭区	まどか工房	社会福祉法人 夢21	障害者サービス事業所 (生活介護)	知的・精神	2017. 5. 11
	横浜市 保土ヶ谷区	ステラポラリス	特定非営利活動法人 ステラポラリス	障害者サービス事業所 (自立訓練)	精神	2017. 5. 24
	横浜市 南区	つながる café	特定非営利活動法人 つながる会	地域活動支援センター	精神	2017. 5. 30
	横浜市 瀬谷区	飛行船	特定非営利活動法人 でっかいそら	障害者サービス事業所 (生活介護)	知的	2017. 6. 4
	相模原市 緑区	ありのまま舎	特定非営利活動法人 ありのまま舎	障害者サービス事業 (生活介護)	知的	2017. 6. 8
	横浜市 泉区	リバーサイド泉Ⅲ のぞみ・ひまわり	社会福祉法人 横浜市社会事業協会	障害者サービス事業所 (生活介護)	身体	2017. 6. 12
	横浜市 瀬谷区	せや福祉活動ホーム	特定非営利活動法人 せや福祉活動ホーム	障害者地域活動ホーム	身体・知的	2017. 6. 22
	横浜市 緑区	みどり福祉ホーム	N P O 法人 みどり福祉ホーム	障害者地域活動ホーム	身体・知的	2017. 7. 12
	横浜市 神奈川区	ひふみ	特定非営利活動法人 あすなる会	地域活動支援センター	精神	2017. 7. 14
横浜市 磯子区	磯子区障害者地域 活動ホーム	N P O 法人 新	障害者地域活動ホーム	身体・知的	2017. 12. 22	
横浜市 金沢区	地域活動ホーム シーサイド	N P O 法人 こんちえると	障害者地域活動ホーム	身体・知的	2018. 3. 16	
文化芸術団体	相模原市	公益財団法人 相模原市民文化財団	公益財団法人 相模原市民文化財団	—	—	2017. 6. 8
	横須賀市	横須賀美術館	横須賀市教育委員会	—	—	2017. 6. 14
	茅ヶ崎市	茅ヶ崎市美術館	公益財団法人 茅ヶ崎市文化・ スポーツ振興財団	—	—	2017. 9. 6

調査研究事業

神奈川県内福祉施設への 芸術活動に関する アンケート調査

今後の障害のある方の芸術活動の取組の参考とするため、神奈川県内（横浜市内※をのぞく）の福祉施設を対象に芸術活動の実態並びに意識の調査を行いました。

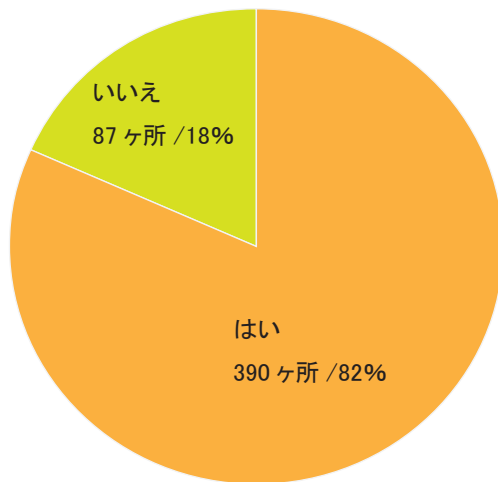
調査期間は、2018年2月1日～2月28日までとし、福祉施設2,026か所に調査票を配布、477か所から回答がありました。（有効回答率：23.5%）調査結果の一部をご紹介します。

※横浜市内については、文化庁委託事業として、

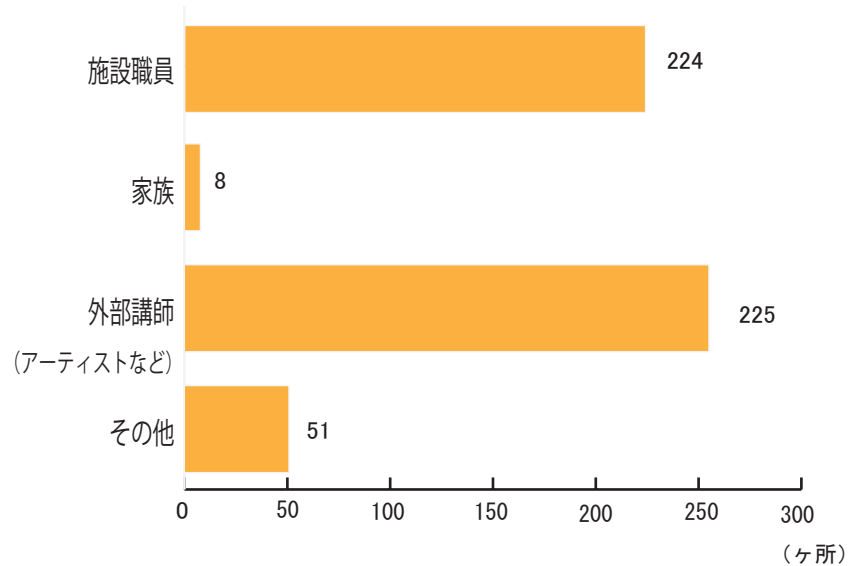
平成27年度戦略的芸術文化創造推進事業「障害と身体表現をめぐる研究会」の一部で実施しました。

結果は、ウェブサイトからご覧いただけます。（<https://welfare-stspot.jimdo.com/>）

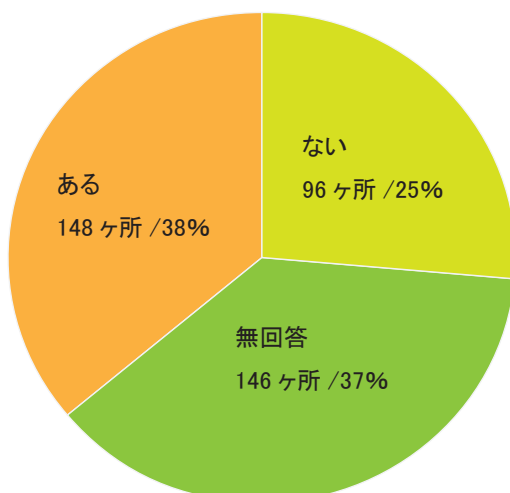
1. 施設として、余暇活動や作業等で現在、文化・芸術活動に取り組んでいること、もしくは取り組んだことはありますか。



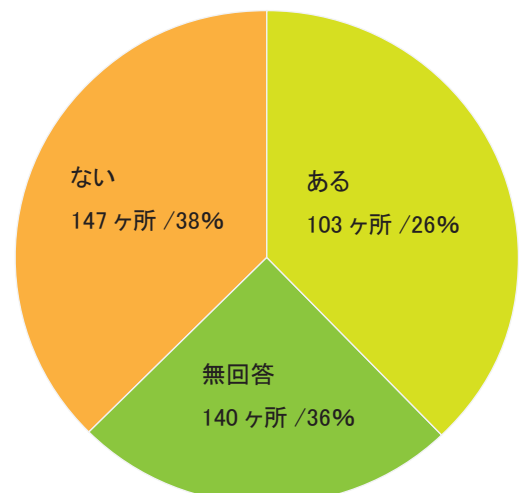
「はい」と答えた方は、お答えください。
1-1. 取り組む際に関わる人は誰ですか。
（複数回答可）



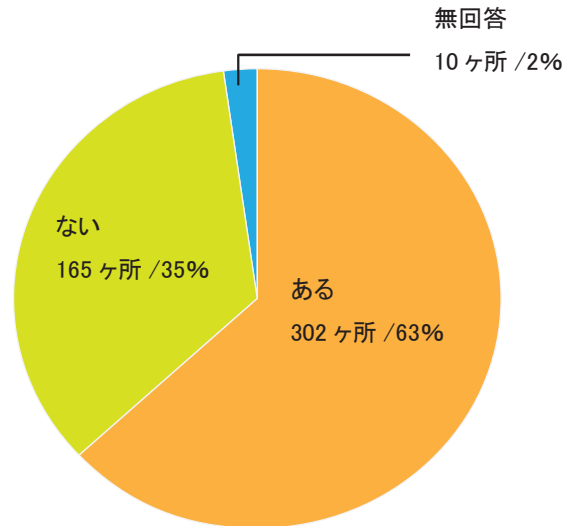
1-2. 活動に関する予算はありますか。
ある場合は全体でどのくらいですか。



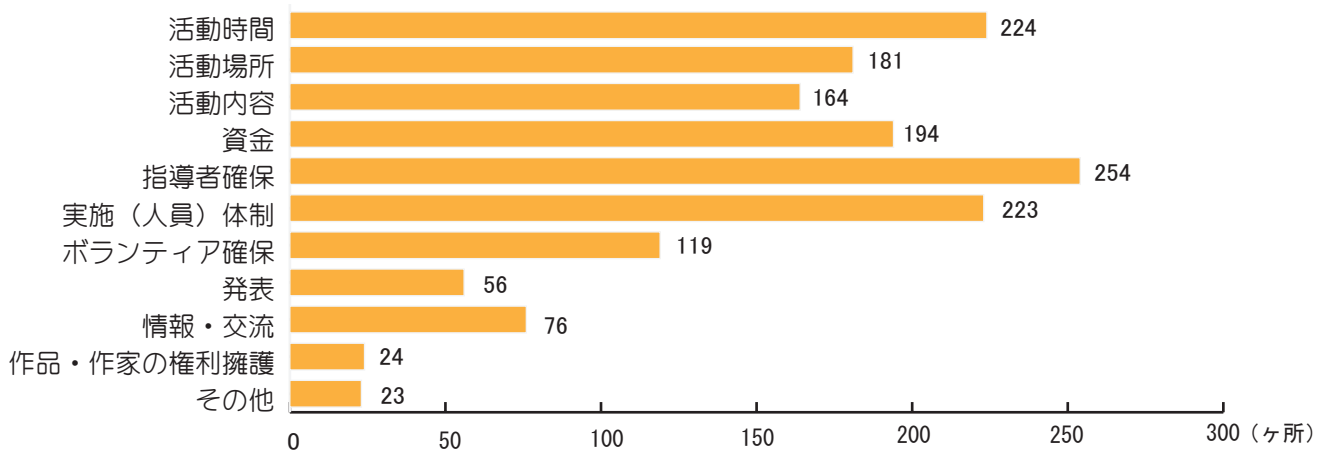
1-3. 芸術活動に取り組むうえで、相談先や協力者（他の団体や企業、NPO、アーティスト、コーディネーターなど）とのつながりありますか。



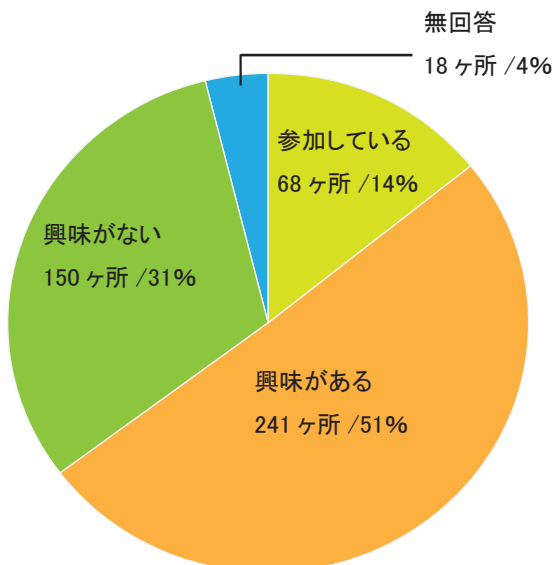
2. 芸術活動に対して、
施設として興味・関心がありますか。



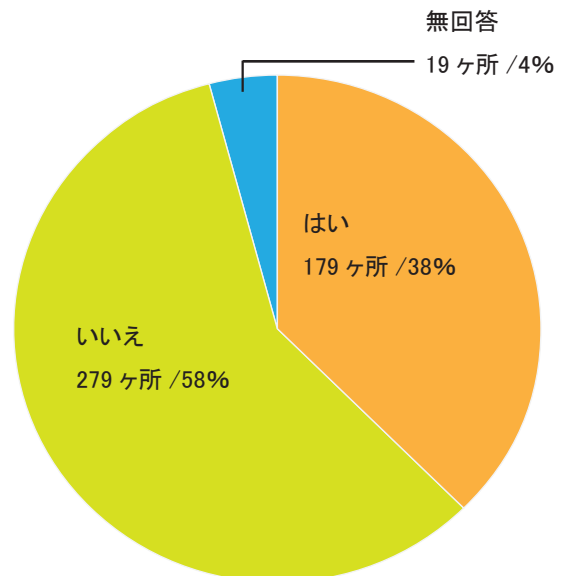
3. 芸術活動に取り組むうえでの課題はなんですか。（複数回答可）



4. 地域で行われるアートイベントに、施設として参加することに興味・関心がありますか。



5. 福祉施設へ芸術家が出向き、ワークショップ型の創作・表現活動を行うことができる場合、貴施設での実施を希望しますか。



障害福祉と文化芸術の 関わりを考える報告会

平成 29 年度かながわボランティア活動推進基金 21・協働事業負担金「地域における障害者の文化芸術体験活動支援事業」では、福祉施設における芸術家によるワークショップ実施事業、勉強会などを通して障害や文化芸術についての知見を深めるコーディネーター育成事業、神奈川県内の事例蓄積を行う調査研究事業を柱に、活動を行ってきました。この報告会では、今年度の活動報告とワークショップ実施事業の1つである、まどか工房と即興からめーる団の音楽の取組みについてご紹介します。あわせて、神奈川県内で障害のある人と芸術家の協働による創作活動を行っているスローレーベルのみなさんの活動紹介も行います。その後は、福祉分野と文化芸術分野について、どういった関わりをつくっていったらいいのか議論を深め、会場のみなさんとともに今後の可能性や展望について考えるきっかけとしました。

ゲスト

- 浦郷大佑（障害者サービス事業所まどか工房）
- 即興からめーる団（赤羽美希、正木恵子／音楽ユニット）
- 塚原沙和（特定非営利活動法人スローレーベル）



3月26日(月)障害者スポーツ文化センター横浜ラポールにて、『障害福祉と文化芸術の関わりを考える報告会』を行いました。

今回の報告会では、障害者サービス事業所まどか工房の職員・浦郷大佑さんと、音楽ユニット・即興からめーる団の赤羽美希さんと正木恵子さん、特定非営利活動法人スローレーベルの塚原沙和さんをゲストにお招きし、『地域における障害者の文化芸術体験活動支援事業』活動報告と、ワークショップ実施事業のひとつである、まどか工房と即興からめーる団の音楽の取組についてご紹介しました。また塚原さんより、スローレーベルの、厚生労働省『平成29年度障害者芸術文化活動普及支援事業』のご紹介もありました。

まずは、会場となった横浜ラポールの和田剛さんにラポールについてご紹介いただきました。続いて、STスポット横浜の田中による事業紹介のなかで、まどか工房で実施したワークショップについての話になります。

即興からめーる団のみなさんからは、施設職員のみなさんと一丸となって実施ができたことがよかったとの意見があがり、受け入れる側の浦郷さんは、音楽ワークショップによって、利用者の

みなさんの普段の様子からは予想もしない良い反応があった、と話されます。

次に、塚原さんから事業のご紹介がありました。事業を実施されるなかで、文化芸術活動をやりたい福祉施設と、興味のある文化芸術団体などを繋ぐ存在、また両者が会えることのできる場所の必要性を感じるとの話が出ました。近隣の文化施設などが両者を繋ぐハブになる可能性や期待がうかがえました。

会場からは、福祉施設で行われるワークショップの芸術性をどう考えるかという質問があがり、批評の足りなさ、重要性について話が及びます。

障害福祉と文化芸術がどう手を取り合っているのか、継続的に考える場がまだまだ必要だと感じた夜でした。



日時：2018年3月26日(月) 19時～20時30分
会場：障害者スポーツ文化センター横浜ラポール 大会議室
(〒222-0035 横浜市港北区鳥山町1752)
参加者数：26名



障害と身体をめぐる旅 2017

編集 / 田中真実、弓井茉那

撮影 / 金子愛帆
(P8-9、P18-21 のみ ST スポット横浜)

デザイン / 加納美海

テキスト / 田中真実、高荷春菜、池田友実、加納美海、川村美紗、弓井茉那

発行 / 認定 NPO 法人 ST スポット横浜
〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸 1-11-15 横浜 ST ビル地下 1 階

発行日 / 2018 年 3 月 30 日

平成 29 年度かながわボランティア活動推進基金 21・協働事業負担金「地域における障害者の文化芸術体験活動支援事業」
認定 NPO 法人 ST スポット横浜、神奈川県保健福祉局福祉部障害福祉課、神奈川県県民局くらし県民部文化課

本事業についてのお問い合わせ
〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸 1-11-15 横浜 ST ビル地下 1 階
TEL : 045-325-0410 FAX : 045-325-0414 MAIL : community@stspot.jp
<https://welfare-stspot.jimdo.com> 福祉分野における芸術文化活動の基盤整備事業

認定 NPO 法人 ST スポット横浜
地域連携事業部スタッフ
ディレクター / 小川智紀 田中真実 アシスタントディレクター / 高荷春菜 池田友実 加納美海 川村美紗 弓井茉那
劇場スタッフ
館長 / 佐藤泰紀 制作 / 持田喜恵 萩谷早枝子 シフトスタッフ / 島崇 田中美希恵
<http://www.stspot.jp> 認定 NPO 法人 ST スポット横浜



ST Spot
Yokohama

